

史跡鳥取城跡附太閤ケ平
櫓蔵跡発掘調査報告書

史跡鳥取城跡附太閤ケ平櫓蔵跡発掘調査報告書

一〇〇一年三月

平成13年3月

鳥取市教育委員会

鳥取市教育委員会

はじめに

この発掘調査報告書は、史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存修理事業の一環として実施した鳥取城跡櫛藏跡の発掘調査の記録です。

鳥取城跡は、市民の郷土を愛する心の象徴であり、後世に永く継承していくべき貴重な歴史遺産です。鳥取市では、このような認識のもとに、関係各機関のご指導をいただき、また、市民各位の深いご理解をいただきながら保存整備に努めているところです。

今年度実施した櫛藏跡の発掘調査も、文化庁、鳥取県教育委員会等の関係各位のご助力によって無事所期の目的をはたし、報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、各位のご利用に供していただくとともに、鳥取城跡理解の一助となれば望外の喜びです。

平成13年3月

鳥取市教育委員会

教育長 米澤秀介

例　　言

1. 本書は、史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存修理事業として平成12年(2000)度に実施した鳥取城跡櫓蔵跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の編集は、鳥取市埋蔵文化財調査センターの協力を得て教育委員会文化課が担当した。
3. 本書に用いた方位は磁北を示し、レベルは海拔標高である。
4. 発掘調査によって作成した記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会で保管している。

目 次

本 文 目 次

はじめに	
例 言	
目 次	
I 烏取城の位置と歴史的環境	1
II 発掘調査の経過と体制	
1 調査の経過	3
2 調査体制	3
III 発掘調査の結果	
1 橋 蔵 跡	4
2 石 段	7
3 碇 石	7
4 石 垣	7
5 送水施設	7
6 出土遺物	11
IV ま と め	16
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 烏取城周辺城跡分布図	2
第2図 調査位置図	4
第3図 調査区造構全体図	5・6
第4図 楼蔵跡南面石垣断面図	5・6
第5図 橋蔵跡石垣断面図	5・6
第6図 楼蔵跡石垣断面図	5・6
第7図 楼蔵跡石段実測図	8
第8図 武者走石垣実測図	9・10
第9図 送水施設実測図	9・10
第10図 第3トレンチ断面図	9・10
第11図 第4トレンチ断面図	9・10
第12図 出土遺物実測図(1)	12
第13図 出土遺物実測図(2)	13
第14図 出土遺物実測図(3)	14
第15図 出土瓦刻印(拓影)	15
第16図 烏取城破損御修覆願図(鳥取県立博物館所蔵)	17

図 版 目 次

- 図版 1 横蔵跡調査前全景(北東から)
横蔵跡調査前全景(北西から)
横蔵跡遺構検出状況全景(北東から)
- 図版 2 横蔵跡遺構検出状況全景(北西から)
横蔵跡西面 南面石垣(南から)
横蔵跡石垣崩落状況(南から)
- 図版 3 横蔵跡南面石垣 東角部(南から)
横蔵跡南面石垣根石状況(南東から)
横蔵跡西面石垣上半郭拡張状況(南西から)
- 図版 4 石段検出状況(北西から)
石段検出状況(北から)
石段右壁石垣検出状況(北東から)
- 図版 5 石段左壁石垣検出状況(南西から)
横蔵跡北面石垣検出状況(北東から)
横蔵跡北面石垣根石状況(北東から)
- 図版 6 石段埋没状況(北東から)
横蔵跡北面石垣前面埋土状況(南東から)
石段左壁背面埋土状況(南西から)
- 図版 7 武者走石垣検出状況(西から)
武者走石垣遺存状況(北西から)
送水施設検出状況(北東から)
- 図版 8 送水施設検出状況(南西から)
上管接合状況(北西から)
送水施設断面(北東から)
- 図版 9 出土遺物
- 図版10 出土遺物

I 烏取城の位置と歴史的環境

鳥取市は、県東部に位置する人口15万人あまりの都市である。江戸時代には鳥取池田藩32万石の城下町であり、現在は、鳥取県の県庁所在地として、政治、経済、文化の中心となっている。

鳥取城は、鳥取平野の東側に位置する久松山の山頂(標高263m)に天守閣を構え、山頂、山腹、山麓に展開する中世山城の様相を呈する城である。

久松山の東側は、秀吉の鳥取城攻めの際に本陣が置かれた本陣山に続くが、他の三方は山頂から急斜面で下る急峻な地形をもち、防御的に適した立地条件を備えているといえる。また、山頂の天守閣からは北側に広がる日本海や、鳥取平野を見渡すことができ、戦略的にも絶好の地に築城されていたことがわかる。久松山周辺には城や砦が築かれており、丸山、雁金山の砦や、秀吉の鳥取城攻めの拠点として陣を構えた太閤ヶ平、昼食山砦が知られている。

鳥取城の起源については、従来、『因幡民談記』の記述から天文14年(1545)布施天神山城の出城として山名誠通によって築かれたとされてきた。しかし、それ以前に当時布施天神山城と対立する但馬山名氏によって天文12年にはなんらかの戦略拠点が久松山に築かれ、これが鳥取城の起源となるものであるという説が出されている。いずれにしても、久松山に城が築かれたのは、16世紀中頃(天文年間)ということになる。

天文年間の政治状況は、布施天神山城を本拠とする因幡守護山名氏と、同族である但馬山名氏との間で因幡の支配権力をめぐって銳く対立した時期である。天文10年(1541)の岩井表の合戦をはじめとして両山名氏の対立抗争は続き、この対立の中で戦略的要衝としての鳥取城が浮かび上がってくる。鳥取城の当初はあくまで布施天神山城の出城であったが、天正元年(1573)、因幡の守護山名豊国は因幡における戦略的・政治的拠点として布施天神山城から鳥取城へ移転し、因幡の本城とするに至った。

その後、天正4年(1576)織田信長と毛利氏との対立から羽柴秀吉による中国攻略が始まった。鳥取城の山名豊国はあまり抵抗せずに降伏するが、この降伏に対し不満を持つ国人層は、豊國を鳥取城から追放し、代わって毛利氏から吉川経家を迎えて秀吉に対抗する道を選んだ。天正9年(1581)、秀吉は再度因幡に入り、反織田勢力の結集する鳥取城の兵糧を完全に断ち切る戦法で攻め、経家の自決をもって鳥取城は陥落した。後にいう鳥取城の「渴え殺し」である。

天正9年(1581)秀吉による因幡平定後、鳥取城には秀吉の部将宮部維潤が入り、因幡の4郡(畠美・法美・高草・八上)を支配した。しかし、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで西軍に与したため、鳥取城主の宮部氏は滅亡した。

宮部氏に代わって鳥取城に入ったのは池田長吉である。長吉は、城内、城下の大改修を行い、山上の丸の天守を三層から二層に改築し、また、山下の丸の二の丸、天球丸の構築、更には三の丸や堀の拡張整備などを行っている。ここに近世鳥取城のおおよその姿を作り上げた。

豊臣氏が大阪城で滅亡した後の元和3年(1617)には、姫路城主池田光政が因幡・伯耆両国32万石の鳥取城主として転封してきた。同時に、鳥取城主であった池田長吉の子・長幸は備中松山に転封されていく。光政の入団によって、これまで小大名によって分割統治されていた因伯両国は一につき統治され、幕藩体制による鳥取藩が誕生した。

寛永9年(1632)岡山藩主池田光仲は当時幼少であったが、鳥取藩との交替転封の命を受けて光政と入れ替り、以後光仲の子孫が明治維新まで鳥取藩主としてその地位に付くこととなる。

明治維新によって廃藩置県が実施されると、鳥取城は池田家から陸軍省の所管となり、明治12年には鳥取城に残るすべての建物は解体撤去された。その結果、鳥取城には石垣、堀等の構造のみが残ることとなった。同22年鳥取城跡は再び池田家のものとなつたが、昭和19年池田家からその土地の全てを鳥取

市へ寄付された。

戦後、鳥取城跡保存の気運の高まりと同時に、鳥取城跡が織田、豊臣時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係を持つ史跡であること、中世の山城の型式を残す古い城跡遺構と、同時に山下の丸を中心とする近世城郭型式を残す新しい城跡遺構が重層して併存することなどが学術的に高く評価され、昭和32年12月18日鳥取城跡のある東町地内と太閤ヶ平のある瀧山・百谷地内約668,663平方メートルが史跡として指定された。その後、昭和62年8月10日円護寺側299,661平方メートルについて史跡の追加指定がされ、久松山のほか全山約968,324平方メートルが国の史跡に指定された。



第1図 鳥取城周辺城跡分布図

- 1 鳥取城跡
- 2 丸山砦跡
- 3 鹰金山砦跡
- 4 早雲山砦跡
- 5 布施天神山城跡

II 発掘調査の経過と体制

1 調査の経過

今回の発掘調査は、石垣の保存修理事業の事前調査として掘藏跡を対象として実施した。現在、掘藏跡には櫓ではなく石垣のみが遺存している。これらの石垣は、後世の荒廃と、昭和18年に襲った鳥取大震災の影響を大きく受け、本来の姿を失う状況となってきていた。特に谷部に面した東面石垣の崩れは著しく、崩落がさらに進む危険性が有ることから修復が早急に行われることとなった。

発掘調査は、石垣の解体、積上げ等の修復工事によって影響がおよぶ範囲を対象として行った。現地調査は、平成12年10月20日から着手し、現況の地形測量から開始した。測量の結果、現地形に改変された状況がみられることから、調査地内に試掘トレンチを設定し原状の把握を行った。トレンチ調査の結果、埋没していた石段や、掘藏跡から天球丸の腰郭に至る武者走の右垣が遺存していることが明らかとなった。また、武者走の石垣前面から土管を配した送水施設も検出された。調査はこれらの遺構の検出と復元可能な記録を取ることを主眼に置いて行い、同年12月14日に現地調査を終了した。その後、出土遺物の整理と報告書作成等の作業を行い、平成13年2月20日に一連の調査を完了した。発掘調査面積は約340m²である。

2 調査体制

発掘調査の体制は下記のとおりである。

調査主体 鳥取市教育委員会

教育長 米澤 秀介
事務局 鳥取市教育委員会文化課

文化課長 北川 逸人
課長補佐 平川 誠
主 事 毛利 元
嘱 託 浜野 るみ子

調査員 前田 均（鳥取市埋蔵文化財調査センター）

調査指導 文化庁記念物課、奈良国立文化財研究所、鳥取県教育委員会、本中真、山根幸恵、坂本敬司
久保義二朗、高田健一

調査協力 鳥取県立鳥取西高等学校、鳥取県立博物館、鳥取市建設部公園街路課、鳥取市歴史博物館
(財)鳥取市公園・スポーツ施設協会、上月工業有限会社、神戸直樹、下田弘人、齊藤博
山下久雄、加藤勝茂、坂本茂、佐々木孝文、伊藤康晴、神谷伊鈴

III 発掘調査の結果

鳥取城の遺構は、久松山の頂上に築かれた山上の丸と、山裾に構えられた山下の丸、そして山腹に展開する諸郭に大別することができる。山上の丸は、山頂を大きく切り拓き、その周辺を高石垣で囲んで郭としたもので、その中心に天守櫓が築かれている。また、山下の丸は、二の丸、三の丸、天球丸、その他諸郭によって構成され、この山下の丸が近世における鳥取城の中核をなしていた。

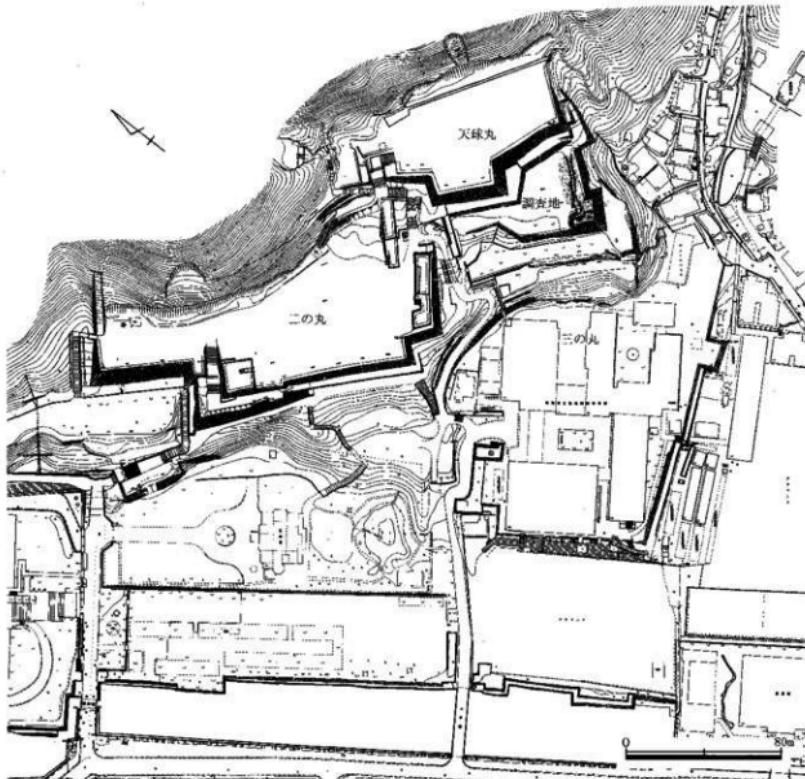
今回の調査対象となった掘藏跡は、山下の丸の最高位に位置する天球丸(標高51.5m)と二の丸(標高13.5m)に挟まれた中段(標高35.0m)に築かれた郭に位置し、この郭の南隅に一段高く積み上げられた石積の上に構えられている。掘藏の櫓はすでなく、その姿は古絵図から見ることしかできないが、今回の調査によって掘藏に付設する石段や石段前底部から礎石が検出された。また、石段から天球丸の腰郭

に延びる武者走の石垣と、この石垣の前面から土管を配した送水施設が検出された。

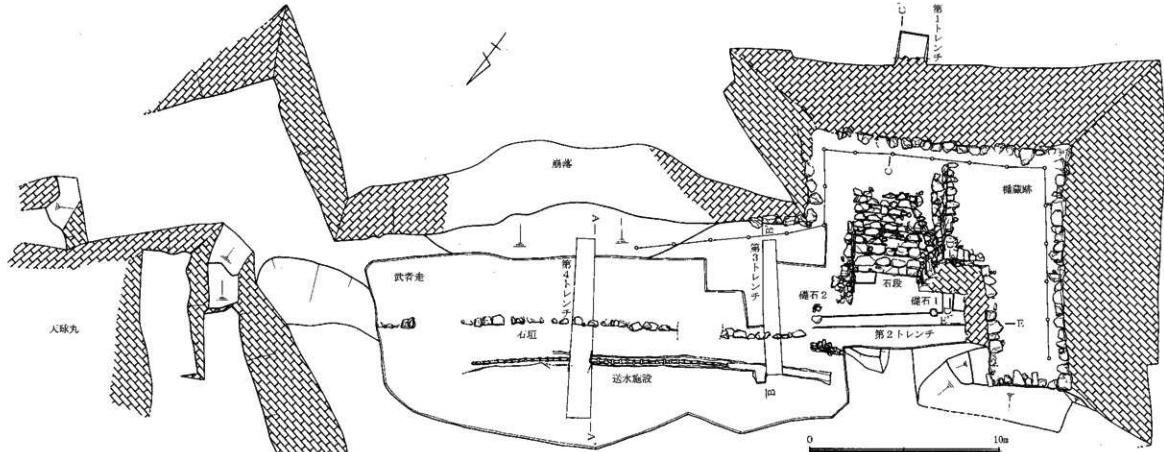
1. 梢蔵跡(第3図)

梢蔵跡は一段高く積み上げられた石垣の上に位置し、西端の南北長12.0m、東端の南北長6.0m、北端の東西長4.5m、東端の東西長6.0mを測る郭をもつ。天和3年の鳥取城絵図「鳥取城破損御修復願図」(第16図)にはこの郭に折廻る櫓が描かれている。今回の調査では建物に伴う礎石などの遺構を検出することはできなかったが、郭の規模から推定して、櫓は最大で2間×3間程度と推測される。

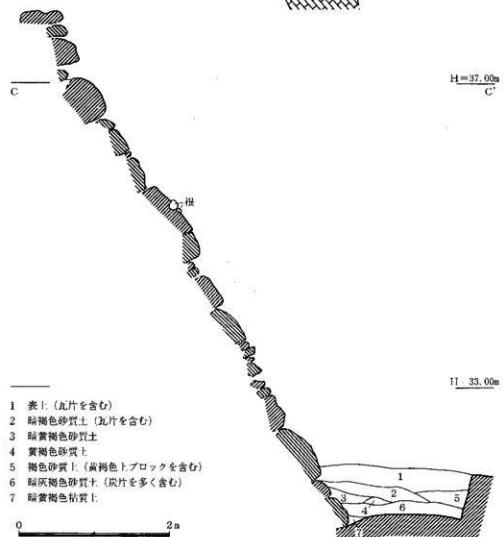
梢蔵跡の西面は高さ7.5mあまりの石垣が築かれている。この石垣の上半部には、角石とみられる算木積みされた石積み状況(図版3)がみられ、郭の拡張が行われていることがわかる。拡張は南北へ6m、東西に4m程度と考えられる。南面石垣の高さは根石から6.8m前後を測る。根石は地山を根切りして置かれている。第1トレーン断面(第4図)の第6層上面が石垣築造当初の面と考えられる。南面石垣は、東端の出角から東面入角、さらに天球丸腰郭の石垣に統くが、この部分の石垣の遺存状況は極端に悪く、今回計画された修復の対象となった箇所である。崩れの著しい石垣の根石状況をみると、出角から入角については根切りした後に地山面に根石を置くが、入角から天球丸舗に延びる石垣の根石は、多量の盛土を行ったのちに据えられている。浅い谷筋を整地し石垣を築いた様子がうかがわれる。



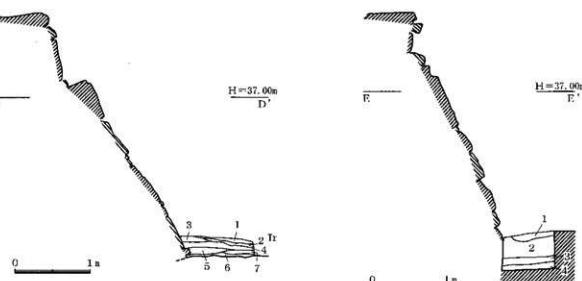
第2図 調査位置図



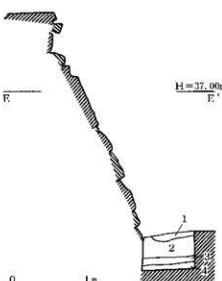
第3図 調査区構造全体図



第4図 植蔭跡南面石垣断面図



第5図 植蔭跡石垣断面図



第6図 植蔭跡石垣断面図

2 石段(第7図)

橋蔵跡にあがる石段である。石段の最上段は露出していたが、その下段以下から石段前庭部には最大で厚さ1.5mあまりの土砂が埋まっていた。埋土中には厚さ50cm前後の瓦堆積層が認められ、廃棄された様相を呈している。石段は段数10段を数え、左右両壁は石垣で構成されている。石段の遺存状況についてみると、下半はおおむね良好に残るが、上半には石材が抜き取られた跡がみられる。また、上半右壁際には幅1.5m、奥行き0.9m、高さ50cmのテラス状の段が造られている。性格は不明であるが、明らかに石段の上に積み足されている。石段の規模は、全体幅最大4.2m、高さは2.45mあまりを測る。各段は長さ45~105cm、幅25~45cm前後の石を4~6石配列して築いている。各段の奥行きは40cm内外、高さ25~30cmである。なお、石垣埋土上面から長さ3.4m、3.8m、幅30~40cmを測る2条の列石を検出しているが、公園整備当時の新しい石段とみられる。

次に左右両壁の石垣についてみると、右壁では天球丸下の角石が壁面より内側に入る状況がみられ、石垣上部の積み替えが行われている可能性が考えられる。左壁石垣は、最上部と前庭部側の角部が失われている。左壁背後の断面観察では、角部近くが大きく掘削された様子がみられ、掘削面の前面に堆積した土中には瓦片が多量に含まれていた。後世の掘削の跡と思われる。石段左壁に天球丸側に向かう武者走が取り付くことが予想されるが、削平により左壁石垣の原状や、武者走との詳細な関係は不明である。左右壁石垣の高さは、石段前庭部から右石垣が3.0m、左石垣は遺存高で2.1mを測る。

石段前庭部は基本的に黄褐色砂質土(真砂土)を厚さ25cm前後盛って整地している。整地した黄褐色砂質土の下層には厚さ5cm前後の焼上層(第5図第6層、第6図第4層)が認められる。第2、3トレンチの断面や、石垣解体後に行った根切り面の観察からも同レベルで同様の焼土が確認され、石段築造以前の焼土面と考えられる。

3 碇石(第3図)

礎石1、2を検出した。礎石1は石段右石垣の山角石から北西1mに位置し、幅30~35cm、厚さ15cm程度の扁平な石を据えている。全体に焼けた痕跡が認められる。礎石2は石段左石垣から北側1.5mに位置している。幅25cm前後の扁平な石を用い、周辺を7~20cmあまりの角礫で囲んでいる。いずれの石材にも焼けた痕跡がみられる。礎石1、2には設置面、大きさ、火を受けていることなど共通点がみられることから同時期の可能性が考えられる。両礎石間の距離は6.0mである。

4 石垣(第8図)

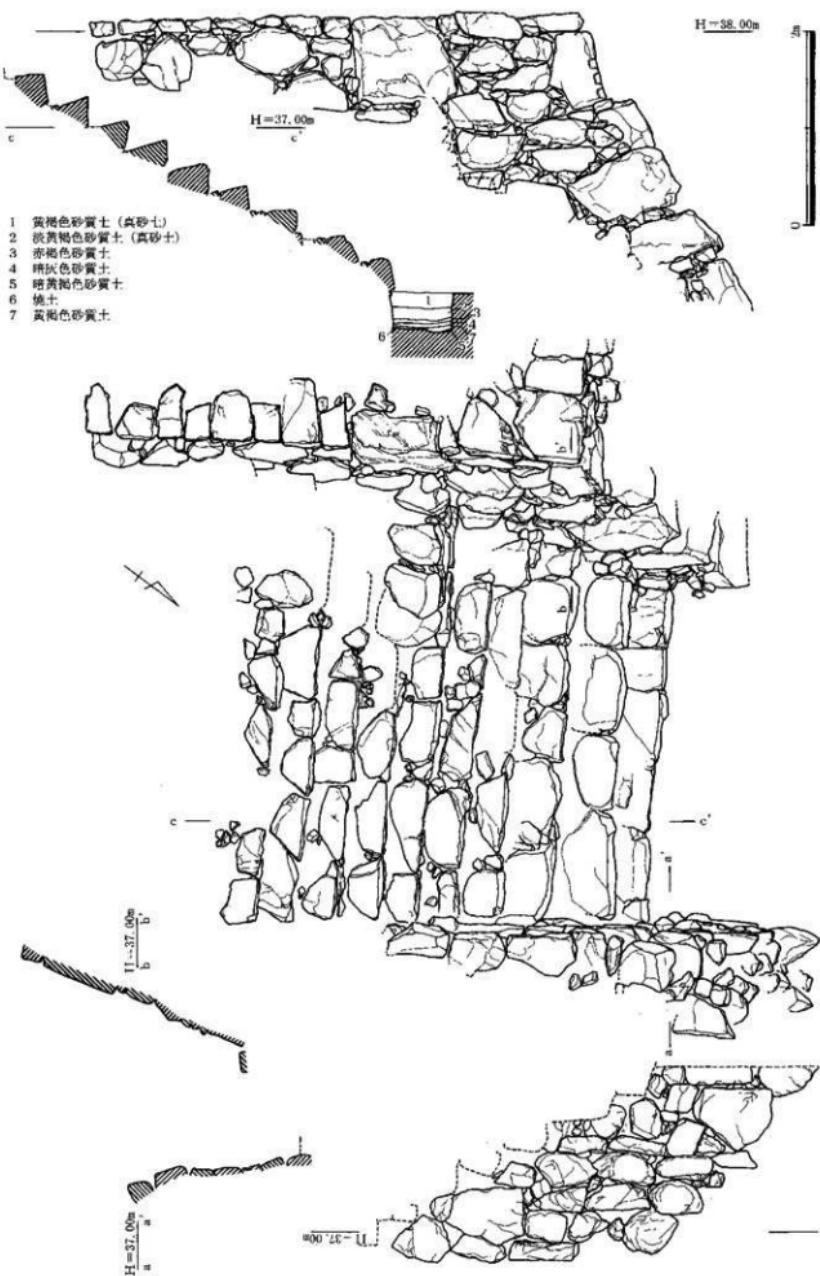
橋蔵跡から天球丸腰郭の石垣に向かって延びる武者走の内側に築かれた石垣である。全長で22.5mを検出した。石垣の遺存状態は悪く崩れ落ちている箇所も見られるが、天場石の一部が残存しており、同部位で石垣高1.3m前後を測ることができる。石垣勾配はほぼ直立し、長さ50cm内外の石材を主体に積み上げている。石垣の背面は多量の黄褐色砂質土(真砂土)を盛土して平坦部を築いている。第3トレンチ断面(第10図)では段階的に盛り上げていった様子が観察される。鳥取城絵図にはこの武者走に堀が立てられている様子が見られるが、今回の調査では堀に伴う遺構は検出できなかった。

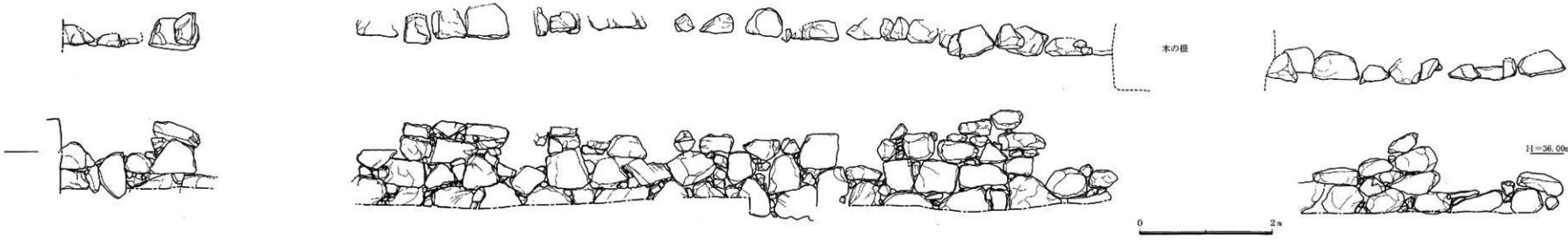
5 送水施設(第9図)

溝内に上管を配管した施設である。武者走の内側右石垣から1.6~2.0m北側に位置し、石垣とはほぼ平行し北東から南西へ延びている。溝の南西側終端部については調査区外となり今回の調査では確認されなかつた。溝はおおむね逆台形状の断面をもち、南西側で深く、北東側では徐々に浅くなり溝の形も不明瞭となっている。溝の規模は南西側で幅32~55cm、深さ25~30cmを測る。底部の高さは南西側が低く、北東端との比高差は38cmあまり認められる。

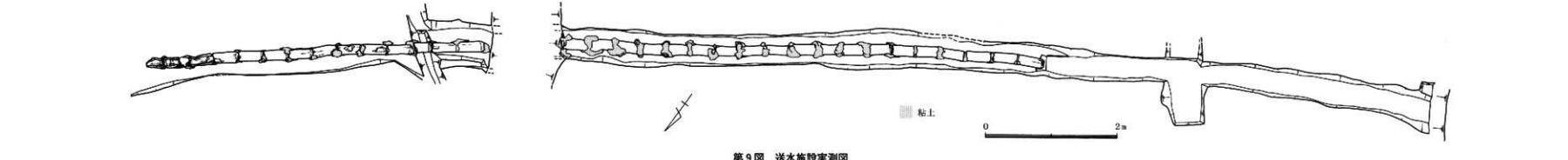
土管は北東側溝内で検出され、全長で13.5mを測る。南西側溝内には配管されていないが、土管が抜き取られている事も予想される。配管は総数にして33本の上管を接合して行っている。土管の接合は非常に丁寧で、凹凸に成形した口縁端部を接合し、接合部に乳白色の粘土を巻き込み白銀色を施している。

第7圖 楊柳鋪石段測圖

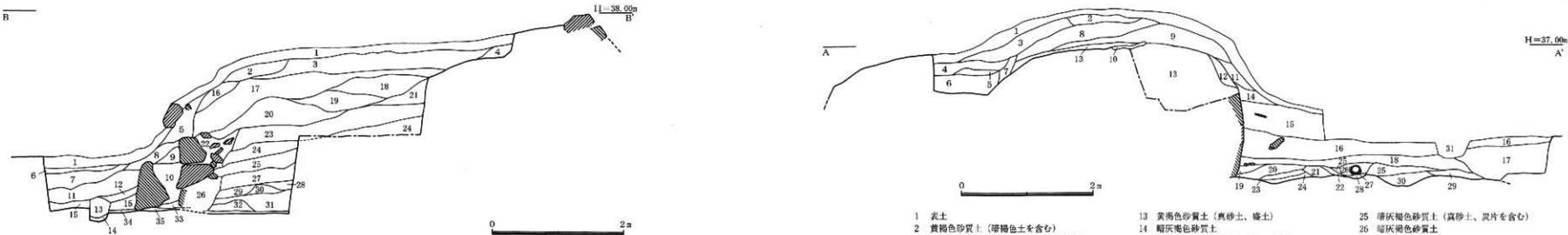




第8図 武者走石垣実測図



第9図 送水施設実測図



- | | | |
|-----------------------|------------------------------|-------------------------------|
| 1 衣草 | 13 黃褐色地質土（黃褐色土ブロックを含む） | 25 黃褐色地質土（真砂土、泥炭、乳白色土ブロックを含む） |
| 4 暗褐色地質土 | 14 灰色地質土 | 26 黃褐色沙質土 |
| 3 褐褐色地質土 | 15 塩化物地質土（真砂土等を含む） | 27 雪藻質地質土（真砂土、炭酸、乳白色土ブロックを含む） |
| 4 暗褐色地質土 | 16 寶褐色地質土 | 28 硫酸鈉地質土（乳白色土ブロックを含む） |
| 5 塩褐色地質土 | 17 塩眞褐色地質土 | 29 黃褐色地質土（泥炭、乳白色土ブロックを含む） |
| 6 黃褐色地質土（真砂土） | 18 黃褐色地質土 | 30 茶褐色地質土 |
| 7 塩褐色地質土 | 19 茶褐色地質土（暗灰色土を含む） | 31 黑灰色地質土（泥炭を多く含む） |
| 8 深褐色地質土（土片を含む） | 20 黃褐色地質土 | 32 茶褐色地質土 |
| 9 布滿黃褐色地質土 | 21 明黃褐色地質土 | 33 刺明黃褐色地質土（真砂土） |
| 10 暗褐色地質土（瓦片を含む） | 22 黃褐色地質土（角礫を多量に含む、栗石） | 34 蒼黃褐色地質土 |
| 11 布滿暗褐色地質土（瓦片を多量に含む） | 23 明黃褐色地質土（真砂土） | 35 赤褐色地質土（幾土） |
| 12 蘭褐色地質土 | 24 泥炭黃褐色地質土（真砂土、乳白色土ブロックを含む） | |

第10図 第3トレンチ断面図



第11図 第4トレンチ断面図

それぞれの土管の人さは、長さ38.3~42.5cm、凹部口径14.4~16.2cm、凸部口径9.4~11.5cm、外径15.2~16.3cm、内径10cm前後を測る。施設の造りが丁寧であることから上水施設の可能性が考えられるが、関連遺構は確認されなかった。溝はさらに南西側に延びており、未調査区に関連施設が存在する可能性も考えられる。

6 出土遺物

遺物は陶磁器(碗、皿、擂鉢、瓶)、瓦(軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、軒棧瓦、道具瓦)、金属製品(釘、玉、煙管)、土管などが出土した。遺物の大半は石段や石段前部の堆積土と表土中から出土しているが、唐津皿の第12図(1)は石段前部の焼上層から、土管は送水施設とみられ溝内に配管された状態で検出された。また、石段埋土から鉄製の玉、鉛製の玉が各2点、武者走の表土中から鉄製の玉1点が出土している。形状や法量から火縄錠の玉の可能性が考えられる遺物である。出土した遺物の遺存状態は悪く破損したものがほとんどである。図化はこれらの中から比較的良好なものについて行った。

陶磁器類(第12図)

(1)は唐津焼の皿である。口縁部3/4残存、高台部完存。口縁部はわずかに外反し、口径11.8cmを測る。底径3.4cm、器高4.3cmである。内面底部に3個所の砂目跡が残る。高台部上位から内外面に釉を施し、全体にオリーブ黄色を呈する。胎土は緻密で1mm以下の砂粒を含む。

(2)は底部である。高台部はわずかに残存し復元底径5.1cm。豊付から高台内無釉。施釉部の色調は明オリーブ灰色を呈する。内面見込みに「福」。高台部上位欠損の為外面は意匠不明。意図的に底面のみを打ち欠いたと思われる痕跡が認められた。

(3)は焼塙壺である。体部4/5が残存し、口径5.6cm、器高8.4cm、胴部径6.1cmを測る。口縁部形態はやや開きぎみで明瞭な頸部は認められず筒型をなし、口径が最大径であるのに対し底径は4.4cmとやや小さい。全体に指成形のちナデ調整され、内面胴部から底部にかけて布目痕がみられる。内外面橙色を呈し、0.5mm以下の砂粒を多く含む。

金属製品(第12図)

(4~8)は鉄釘である。いずれも角釘で釘頭断面は方形を呈する。(4・6・8)は完存とみられ、遺存長31.15cm、10.95cm、6.0cm、重さ94g、20g、4gを測る。(5・7)は尖端部が欠失しており、(5)は遺存長22.15cm、82gと(4)同様大型の釘になるものと思われる。(7)は尖端部がわずかに欠いており、遺存長7.2cm、8gを測る。

(9)は真鍮製の煙管である。瓶首部の遺存状況は良く、長さ7.2cm、火皿口径1.55cm、火皿底部孔径は0.43cm、羅字の取付け部分の口徑1.0cmを測る。

(10)は真鍮の鉤形(?)製品である。L字型を呈し遺存長8.3cm、厚み0.4~0.6cm。鉤部分は片面刃状に造り出され、長軸方向には継続的に細線状の痕跡が認められる。

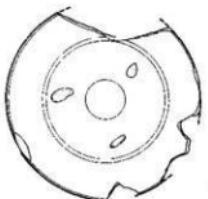
(11)は鉄製の玉である。約1/2の残存で鋸歯化が著しい。外径約5.2~5.4cmとほぼ球形を呈するものと思われ、重さは224gを測る。他にも半載状のものが2点出土しているが、いずれも形状・法量はほぼ同じである。(12~13)は鉛製の玉である。(12)は一部を欠失するが、いずれも外径1.4cm、重さ16gを測り、灰白色である。

瓦(第13~14・15図)

軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、軒棧瓦、道具瓦の鬼瓦、鳥糞瓦が出土しているがいずれも破片である。(1~24)はそれらの中でも状態の良い瓦とその拓影である。(1~13)の揚羽蝶文は陰・陽刻と蝶の表情で、簡素で平面的なものからリアルなものまで多種多様の蝶を表現している。

軒丸瓦

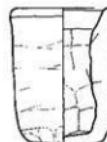
(1~4・6~13)は揚羽蝶文、(14~15)は三ッ葉文、(16)は三ッ葉葵文である。(1)は瓦当部外縁をほとんど欠損するが他は完存しており、軒丸瓦のその概要を知ることができる。復外径16.0cm、内区径



1

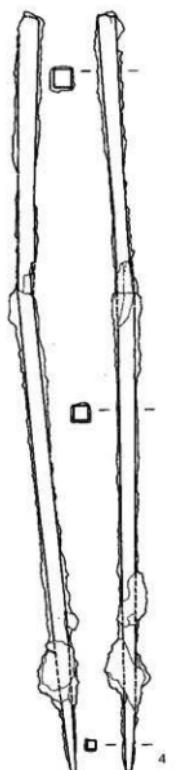


2

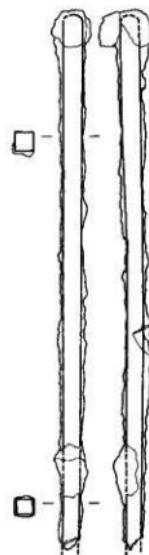


3

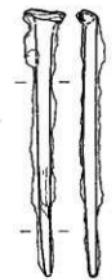
0 10cm



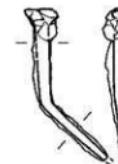
4



5



6

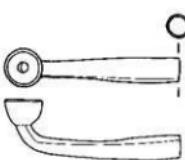


7

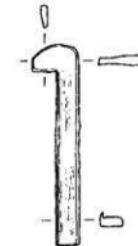


8

0 5cm



9



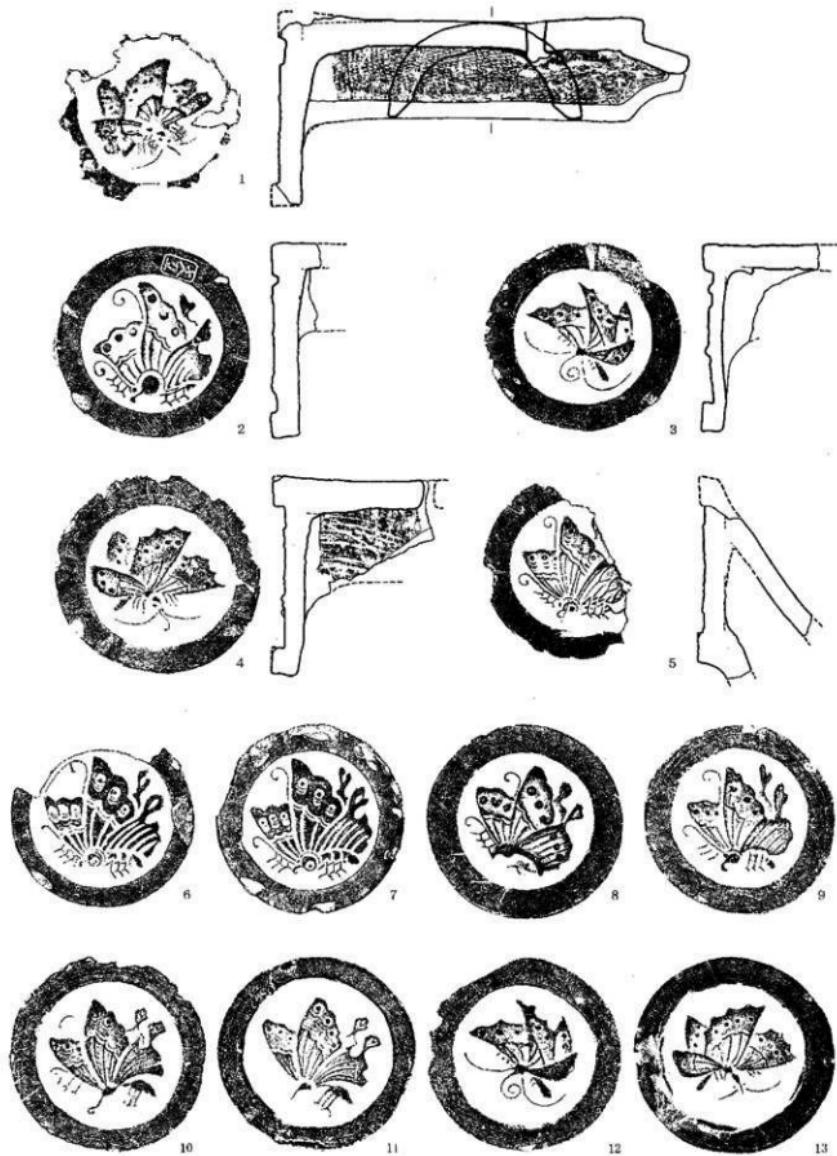
10

0 5cm



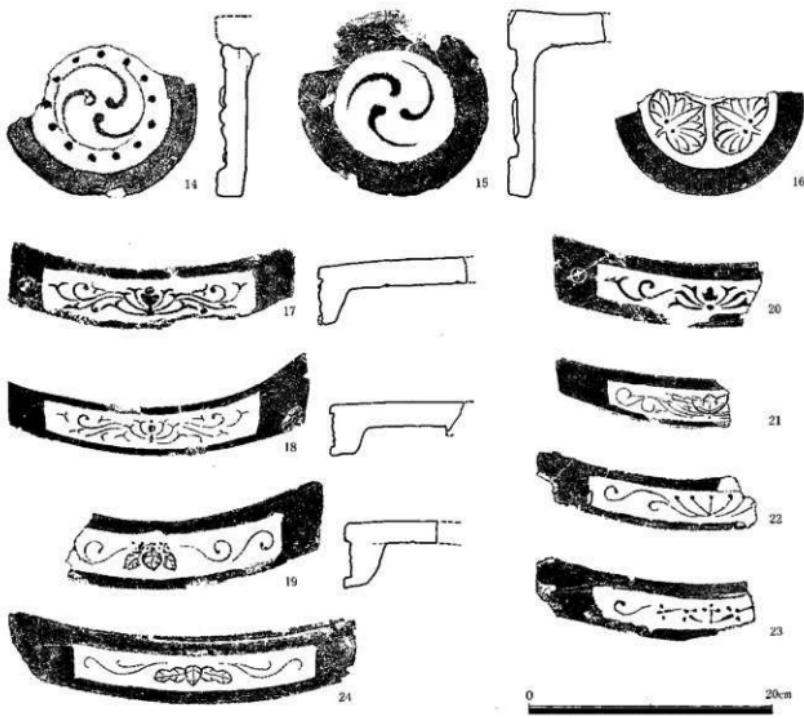
0 5cm

第12図 出土遺物実測図 (1)



第13図 出土遺物実測図（2）

0 20cm



第14図 出土遺物実測図（3）

11.8cm、全長34.0cmを測り、胴部に釘留孔を有する。(14・15)は三ッ巴文で、(14)は左巻き巴に13の珠文を配し、その尾は細長くほぼ半周する。外径は15.7cm、内区径10.2cmを測る。(15)は巴のみで珠文をもたず、その瓦当面の外線は2.6~3.3cmと幅広い。この他にも右巻き三ッ巴、珠文の有無等、様々出土している。

軒平瓦

(17~24)は中心飾りをもち、全ての模様が違う。中心飾りに花文をもち(17~23)、均整唐草に子葉を表現したもの(17・18・20)、葉脈が簡素な線描写だけとしたもの(22・23)、中心飾りを木の葉文としたものなど多様である。

道具瓦

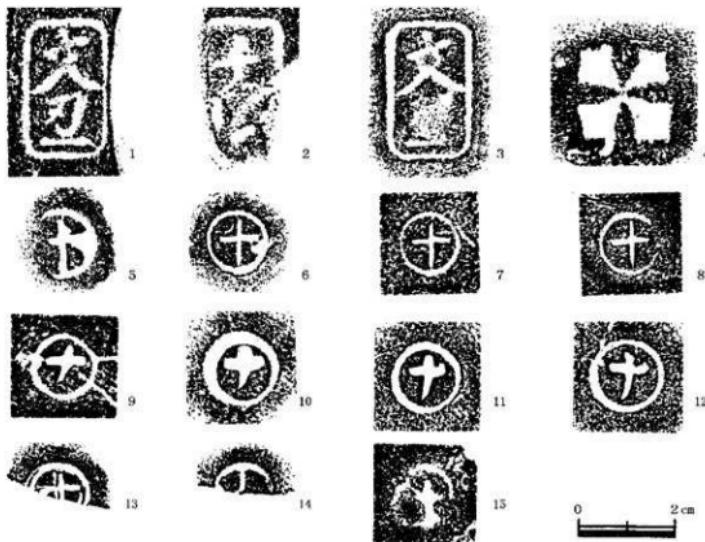
(5)は鳥食瓦である。瓦当面約3/4の残存で、外径15cm、内区径10.5cmを測る。左正面を向いた揚羽擦を施している。他に道具瓦として、図化はしていないが鬼瓦片が出土している。

印刻瓦

(第15図)は瓦に施された印刻の拓影である。(1・2)は軒丸瓦瓦当面、(3・4・10~12)は丸瓦凸部、(5)は軒丸瓦凸部、(6~8)は軒棧瓦脇区、(9・15)は軒平瓦脇区、(13・14)は平瓦前面中央に施されている。この中で分別してみると、大きく4つに分けることができる。(1・3)は□に文囚(?)と読み取れる(第13図2)。(4)は4個の菱形を花びら状に組合せる。(5~8・13)は○に+、(9~12)は○にナの印刻を施す。

土管(第14図)

(25~26)は土管である。現状では33本の土管の遺存が確認されており、その中で比較的状態の良好なものと半截されたものの実測図を取り上げた。(25)は全長39.5cm、外径15.8cmを測る。歪な円筒型を呈し、端部は胴幅より狭くすぼめ、もう一方はその傾斜にあわせた角度でナデあげる。基本的には瓦と同様の造りで仕上げられている。



第15図 出土瓦刻印(拓影)

IV まとめ

鳥取城は、鳥取市街地の北東に位置する標高263mの久松山に築かれた中世山城の様相を呈する城である。鳥取城の遺構は、大きく久松山山頂に展開する山上の丸、山裾に築かれた山下の丸、山腹に形成された營跡などに分かれる。山上の丸は、久松山山頂を切り拓き高石垣で囲って郭とし、本丸の北西隅にさらに高く石積みをして天守閣を構えている。東側には二の丸、三の丸と呼ばれる郭があり、西側には出丸が設けられている。この出丸から西の尾根を下ると鐘ヶ平、太鼓ヶ平、松ノ丸などの遺構が残っており、これらが近世前の鳥取城の主要な城郭と考えられている。山下の丸は二の丸、三の丸、天球丸、その他の諸郭によって構成され、近世における藩政の中核となっていた。これらの郭の骨格は、関ヶ原の戦い後に鳥取城に入城した池田長吉によって築かれている。また、山腹に見られる遺構は、山頂に至る主要な尾根を中心にみられ、山上の丸が鳥取城の中心であった近世初期までに築かれたものと考えられている。

鳥取城の現状は石垣と堀が残るだけである。この石垣からは当時の偉容を窺ぶことができるが、昭和18年に発生した鳥取大震災の影響によって随所で原状を失いつつあった。このような中、史跡指定後から石垣の復元修理が随時実施され、現在その姿を取り戻しつつある。

今回の発掘調査は、震災の影響を受けた櫛藏跡の石垣修復工事に伴い実施したものである。調査は鳥取市教育委員会が行った。調査の結果、櫛藏に登る石段や武者走の石垣、礎石、土管を用いた送水施設などが検出された。調査面積は約340m²である。

櫛藏跡は、天球丸と二の丸に挟まれた中段に築かれた郭の南隅に位置し、一段高く積み上げられた石垣の上に構えられている。現在、櫛藏跡に構はないが、その姿は『鳥取城修復願図』延宝8年(1680)、第16回の『鳥取城破損御修復願図』天和3年(1683)、『鳥取城修復願絵図』亨保6年(1721)、『鳥取城修復願絵図』万延元年(1860)など各年代の絵図に見ることができる。これらの絵図を見ると、延宝8年の『鳥取城修復願図』には1棟、それ以降の図には2棟の櫓が描かれている。延宝8年から天和3年の間に増築されたことが予想される。『鳥府志』には櫛藏について、「天球丸と二の丸の間に在る廓なり。南の隅に折廻りたる御櫓あり。御櫓とは、此名に称るなり。」また、「当城に享保の余煙を免れたるは、唯この御櫓と山上の月見櫓のみなり」とある。櫛藏の名称や、亨保5年(1720)に発生した大火事にも延焼を免れたことが記述されている。櫛藏がどのような機能を果たしていたかは分からぬが、近世鳥取城のかなり占い段階から長期にわたって存続していたことがうかがわれる。櫓の規模は石垣の遺存状況からみて2間×3間程度と推定される。

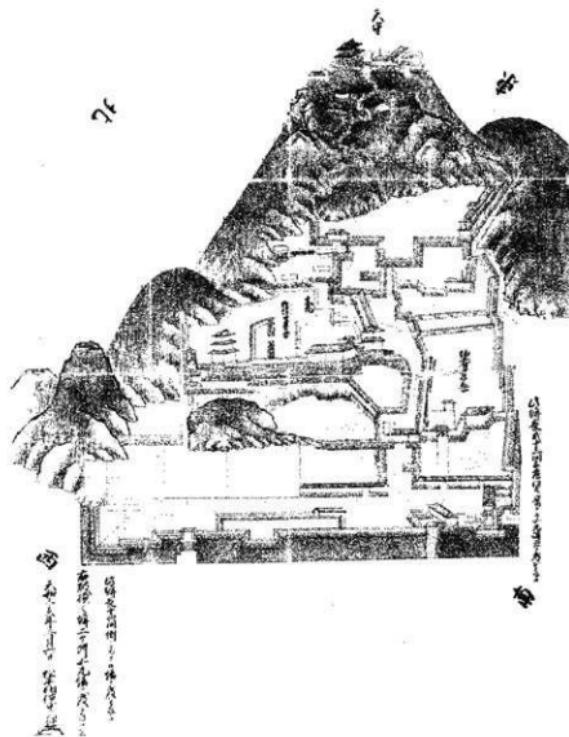
今回の調査で櫛藏に上がる石段が検出された。石段は櫛藏跡の北東側に付設され、幅4.2m、高さ2.45m、段数10段を数える。この石段から天球丸脇郭の石垣に向かって武者走が築かれている。この武者走からは内側に積まれた石垣が検出された。かなり崩れ原状を失っていたが、良好な遺存部で高さ1.3mあまりを測ることができる。武者走は櫛藏の石段左壁に取り付くものとみられるが、削平されておりその詳細は不明である。

検出した武者走の石垣前面から送水施設を検出した。送水施設は長さ40cm前後、外径16cm、内径10cm内外の上管をつなぎ合わせて溝内に配管している。配管は非常に丁寧で、接合部に乳白色の粘土を巻き、目張りを施している。造りの丁寧さなどから上水施設の可能性を考えられる。今回の調査では終端部を検出することができなかったが、土管を埋設した溝はさらに南西側に延びていくことから、郭内に送水施設に伴う遺構が存在することも予想される。

遺物は瓦、陶磁器、焼塙壺、土管、金属製品が出土した。遺物の遺存状態は悪くいずれも破片状態の出土である。遺物の大半は表土中、石段と石段前庭部の埋土中から検出されたが、石段から鉄釘、石段右壁直下の前庭部から唐津焼の皿が1点出土している。土管は溝内に配管された状態で33点出土した。

瓦には揚羽摩文、三ツ巴文、三ツ葉葵文の軒丸瓦や、花文の中心飾りをもつ軒平瓦のほか道具瓦の鬼瓦、鳥衾瓦が出土している。また、刻印された瓦(第15図)が出土している。陶磁器は碗、皿が主体で擂鉢、瓶がわずかに含まれている。伊万里焼、唐津焼の皿、在地の浦富焼の碗もみられる。金属製品として鉄釘、鉄矢、鉛玉、煙管、真鍮製の鉤形製品などが出土した。鉄釘には大小がみられ、31.1cmを測る長大な釘も出土している。鉄玉は3点出土した。いずれも約1/2を欠くが直径5cmあまりを測る。形状や一定の法量をもつことから200玉目大筒の玉の可能性も考えられる。鉛玉は2点出土した。いずれも直径1.4cmを測る。4.5玉目火縄銃の玉とみられる。

今回の調査で埋没していた櫛蔵の石段、武者走の石垣、また土管を用いた送水施設などを検出することができた。調査で得られたこれらの資料をもとに、櫛蔵跡の修復が行われ、鳥取城の姿が少しづつ復元されていくこととなれば幸いである。



第16図 鳥取城破損御修復願図（鳥取県立博物館所蔵）

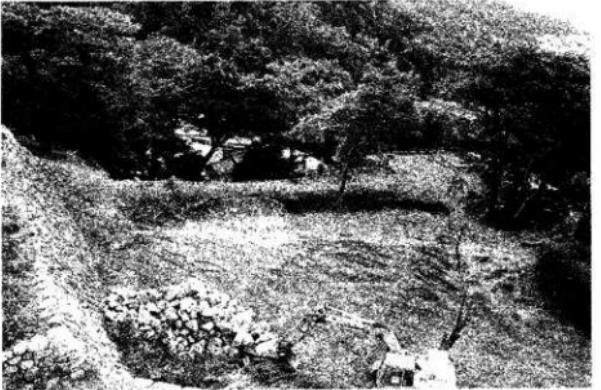
参考文献

- 鳥取県立博物館「久松山鳥取城—その歴史と遺構—」『鳥取県の自然と歴史-6-』 1984年
- 鳥取県立公文書館「鳥取志園記」 1994年
- 鳥取県立博物館「鳥取城絵図集」 1998年
- 鳥取市「新編鳥取市史」 1983年
- 鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附人間ヶ平 保存修復概要報告書」 1987年
- 鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天守丸保全整備事業報告書」 1997年
- 鳥取市教育委員会「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 太鼓御門全剥離調査報告書」 1998年

図版 1



柵跡調査前全景
(北東から)

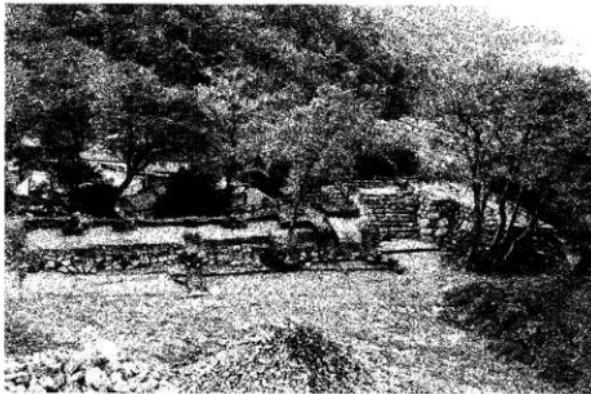


柵跡調査前全景
(北西から)



柵跡遺構検出状況全景
(北東から)

図版 2



掘藏跡造構検出状況全景
(北西から)



掘藏跡西面 南面石垣
(南から)



掘藏跡石垣崩落状況
(南から)

図版3



桶蔵跡南面石垣 東角部
(南から)



桶蔵跡南面石垣根石状況
(南東から)



桶蔵跡西面石垣上半
郭埴張状況
(南西から)

図版 4



石段検出状況
(北西から)



石段検出状況
(北から)

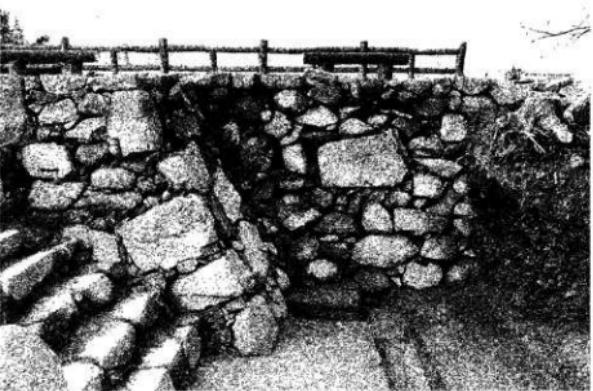


石段右壁石垣検出状況
(東北から)

石段左壁石垣検出状況
(南西から)



櫛蔵跡北面石垣検出状況
(北東から)



櫛蔵跡北面石垣根石状況
(北東から)



図版 6



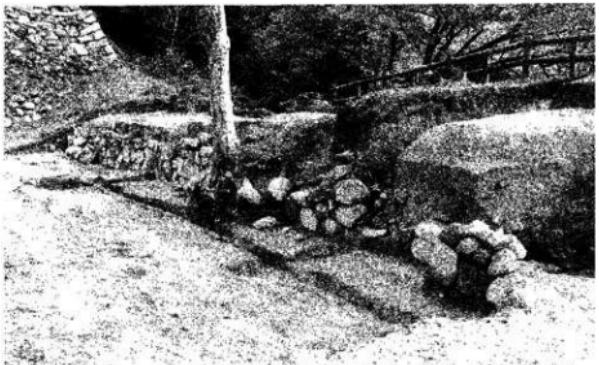
石段埋没状況
(北東から)



桶藏跡北面石垣前面
埋土状況
(南東から)



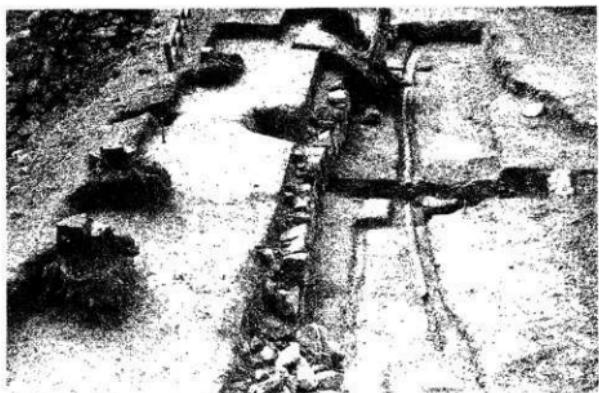
石段左壁背面埋土状況
(南西から)



武者走石垣検出状況
(西から)

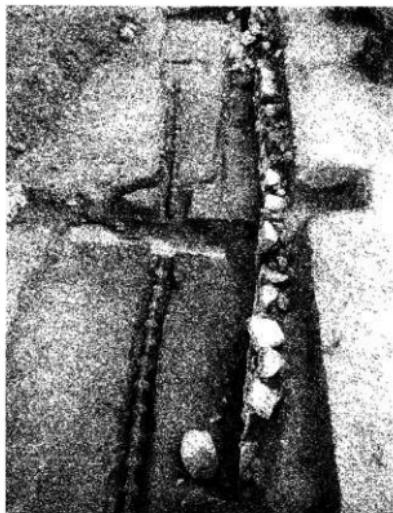


武者走石垣遺存状況
(北西から)

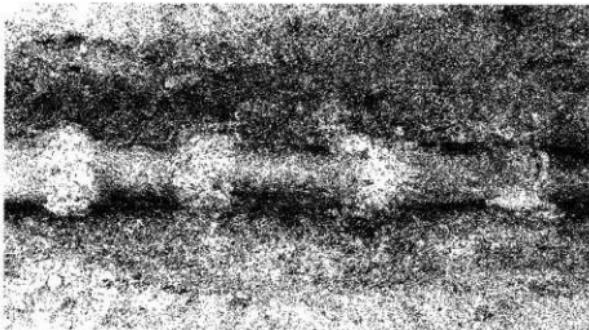


送水施設検出状況
(北東から)

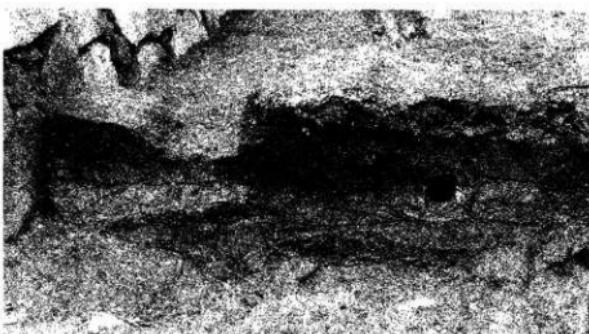
図版 8



送水施設検出状況
(南西から)



土管接合状況
(北西から)



送水施設断面
(北東から)



12-1



12-2



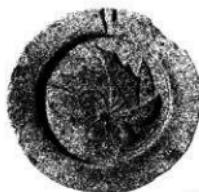
12-3



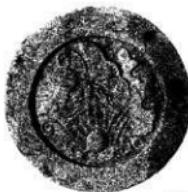
12-6 + 8



12-9



13-3



13-2



13-7



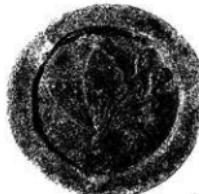
13-8



13-10



13-9



13-11



13-13



14-15



14-16

図版10



14-17



14-18



14-20



14-24



15-01



14-26



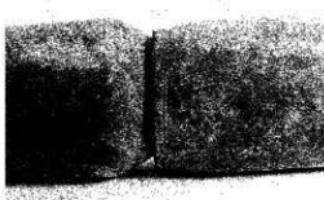
14-25



14-25



14-25



報告書抄録

ふりがな	しそきとつとりじょうせきつけたりたいこうがなる たてぐらあとはくつちょうさほうこくしょ						
書名	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 横蔵跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	平川 誠 前田 均 神谷 伊鈴						
編集機関	鳥取市教育委員会						
所在地	〒680-0047 鳥取県鳥取市上魚町39 TEL 0857-22-8111						
発行年月日	西暦2001年 3月26日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
史跡鳥取城跡 附太閤ヶ平	鳥取市東町	31 201		35° 30' 13"	2000.1.02 ~ 2001.3.23	340m ²	史跡 鳥取城跡附 太閤ヶ平 横蔵跡整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
史跡鳥取城跡 附太閤ヶ平 横蔵跡	城郭跡	江戸時代	石垣 石段 送水施設	瓦 陶磁器 土管 鉄釘 鉄製玉 鉛製瓦	埋没した石垣、石段を 検出 土管を用いた送水施設 を検出		

**史跡鳥取城跡附太閤ヶ平
橋蔵跡発掘調査報告書**

平成13年(2001)3月

編集 鳥取市教育委員会

発行 鳥取市教育委員会

〒680-0047 鳥取市上魚町39

印刷 株式会社矢谷印刷所 ☎23-7551